



新編女水滸傳

二之卷

~ 13
3561
2



門 13
 號 3561
 卷 2

新篇女水滸傳卷之二

浪速 好花堂主人野亭著

兩臣失罪囚穰源家災害
 四賊會山僧獲平氏貴胃

三回



宗八郎等四人と従平小守らせりし後て進み大隈封境のけりまで
 行はし一箇の叢林に樹根より四人の女僧懸居り兵士等も往り
 婦をとりて叱りしに其人の女僧曰邦君の巡守ともえし路まはせり
 さはし青のひそと自若として強く色はし兵卒等も人きり怒り
 乞地共いて幸れ國をせんといふかると兩人の酒估をり来て割一箇

新編女水滸傳卷之二

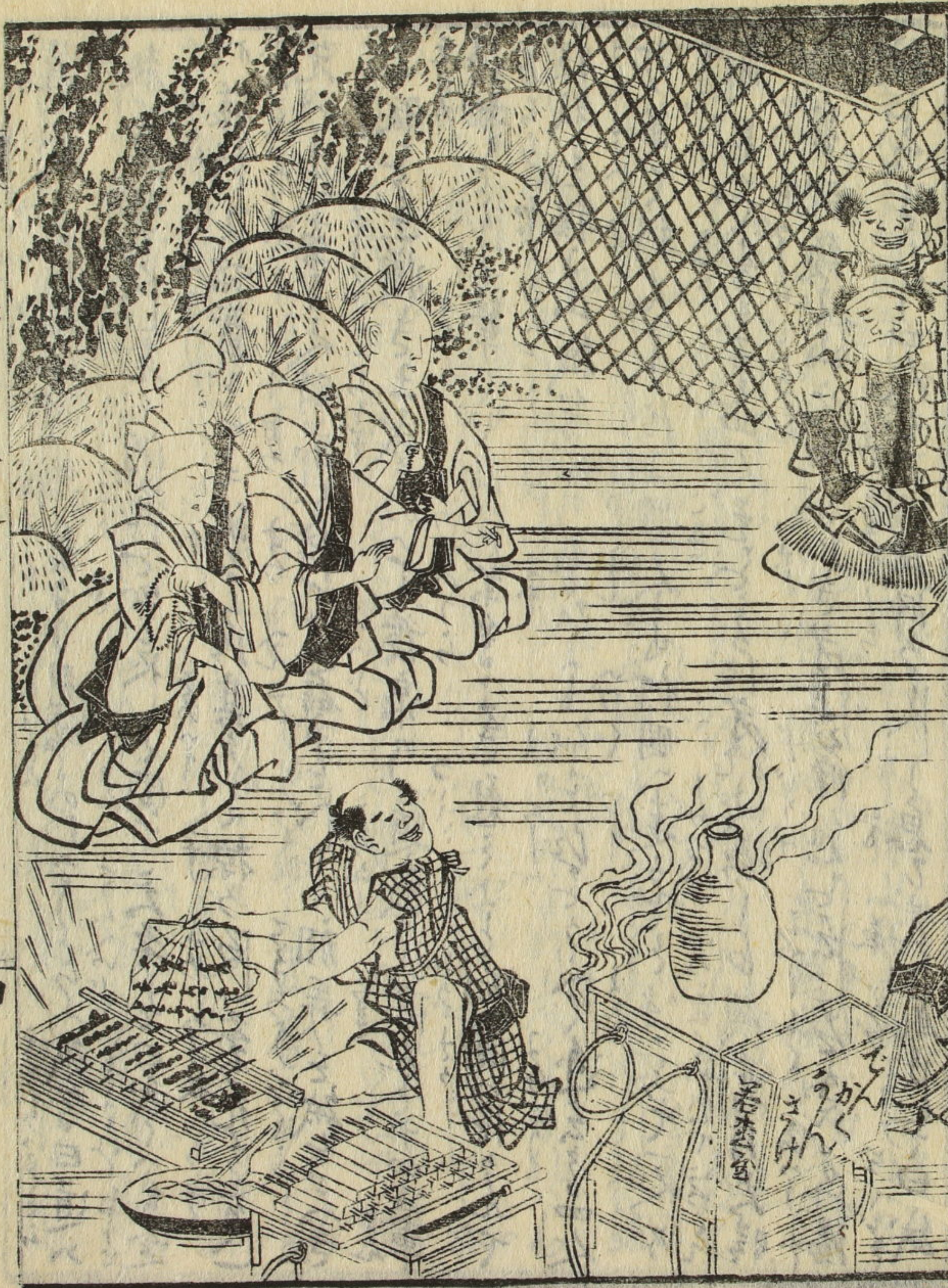
早稲田 大學 図書館
 第 34.6.3 號
 藏 書

尼姑と叱て曰和僧多所不奈内とゆ是は依く未家此
 々大いなる天の醒井公とて圓光曰若の願貴家より非礼の
 罪と謝べと教ふる女信多大き一駭一休して年と撞て
 謝る高宮醒井に更なる出来て此来と種て日く大に
 怒り程撃懲んとは酒賣言辭と経謝る又ま人の田樂
 佐来かり俱し謝るは五郎進をゆく怒りと宛扱ひは
 竟目役脚して咽湯より脚着が酒とつる手まら其乞姫法共
 又十杖つれ持とののせんと様はる言察は酒估頭と撞はし
 ろれ慰解を寒厨と減却さすりまらされ九姑と救れば
 来世へ上生の基よて百味の飲食は飽て快樂やまらん
 志し偏撞斗は残るるべと其るふ入席進を笑壺入

先小言と止て教梳盛来まこと命じ扱回樂估よ向ひ汝もや
 うは田樂一汁とてせ下物小らんと様車の傲言よ是誰
 教十串の田樂とてせ出せば酒估も六梳と盛てはし出す西土頗
 喜ひ忽ら二梳と喫して教扱扱も汝もろくと又三梳と飲
 兵士も一向い汝も滴汗で喋りて勇と魁よと命まら兵士
 笑我れと飲うら高文入高醒井軍を忽ら地は倒きて
 延と尻も支半の啼ぶめ此時尼僧も起て囚人此軍興と
 用き縛とて此れは入所大に驚き起んする一令身志し
 て動止と扱は醒井に酒と喫せ兵士も同じく働きは眼
 の能願よと飲ざる兵士も大き一強き切てうら女信多か
 捲んでくつて入席進八郎号は行者の救し思は是を就思

うぐの者共うれはんきし喜ひ俱し兵士と切散す河内田樂依
 兵士と剣と棄て俱し傷多し佐々木士率八百へうが教賊兵ハ
 といと供堂て林中し地入道と棄て一箇山中し入初て息とぎ
 互し不思議の奇遇と喜ひ多し玉笠を後月と返て四角小交信
 させまの慈母と信まひ四人大きき謝一危との慈情にて家く又
 再會の時と喜ひ多し喜ひ多し退く茶賊ども地來りる
 皆種々の高賈し扮装より若系が曰家堂一併し山寨へ歸る
 人怪しむ其扮装の怪面人づらと異て下るし玉笠をもち
 祿月君向らし長柄の紺寓し久り秀の蘭君と伴うし山寨へ
 ちむし系軍四人の慈母及者と安と変大和を紀伴よりうり後
 略へ波るしと指教すまへ一日其意と得て成り三人中と父箇

宛異途し八方へ逃去る彼高きみ所破井室を踏酒小醉酔
 ちる者も酒氣に換るし酒の氣漸く消し五袴動止と
 得て大きき喜ひ多し共大切の罪囚と逃しこれへ圓へ歸るともよも
 罪と免まはしと二人高儀とて安より逃電し幼勝あかりぬ
 却説玉笠龍岡の津圓小帰し其余れ紙も思ひくは後列へ
 下りしが苦みも四人の太和路しわが紀列へと志し急流し十津
 川郷内山徑し入て忽ち方向と失ひ行共く一處路し不知途
 方小登し時節忽然して一聲の聲を響ききこへ傍の茂林より
 十四五軍の山名出れし四人の中し取圍て齋色し曰慈野及
 者に見ゆが定て踏費と懐中し定し家軍も賈路後と恵み
 くと罵る四角小交信思ひ言くるは死にへ事止し人々うねるを



天不詩集卷之三

四



兩個嘉臣
失罪囚

天不詩集卷之三

道をゆゑ迷ひ罪儀の旅客なり引路よあむなりとて入城言曰道入
 教てさらまじし先く酒直とせよとて圍て云平を曰我々の途
 行旅の又路費とてもはらふらば其方より掠り取らば花も夜
 先此方へ去りて時節を待て返すまじしと酒弄を城守人き
 入腹とて憎き土民うねりて黄泉の道教を云んと十四五軍
 得物とてりて撃てかたき其方より去りて向國ははらんで
 投教を程よ山城守の勢ひも血を流さうへて逃去る四人
 折交て約んとすは罪人ども何國へ走らんと叫ぶて一人は
 解鬼へて来ると四人をさうにたれと長く白顔赤目天晴
 の言親顔よ山守巾とたき牙よ藤色と云しをさへ八方湯
 扱とらさたり四人は云氣滅肝と云しと息ひ色と勵はして曰城

僧とんと大膽なる汝州城皆我軍が練よ思を逃去て生と
 食も汝一人は飽むか吐き山僧呵くは燕雀を驚て鳥
 盛うりと思ひ程大膽とてとらば土偶のどん山嶽に敷て
 ほらとて不便なき小城守が互離よ汝もがもまを引接儀
 狼の腹と肥まん女々々も少しハ腕骨のり者ともあはれ
 と改て我は伏せむと云ふ命を保つて一期を待たばとて春
 然として汝放其四人たきと怒り憎む賣主が大言うねりて腰
 骨採打てわらばとて四人比く力長とぬく刀磨おせんとて
 かる解魔自善とてわら見付と冒よまはしりの四人五拜す
 らして働きはるも口唇とあつりらも沐浴をのり縛るが
 しくる是は思ひ絶てしとてはる果る解魔冷笑しうと

女水滸傳卷之二

卿多傷むや我多事年の苦行を積り行かざりて不動の傳
 一のめしたまへ一すも動き得し心を改めや吾や吾も依て
 生記と免めよと確と白眼一形相身のみよばつて免る
 声系心中に感伏し断る者と左祖に属るは天晴候
 頼社まと思惟しやうる驚入る貴僧の行徳感激し堪
 先傳と病しやうる言ありと云ふれは解鬼うづき又
 心下を解し忽ち今も自由を得り四人跪て曰実我も
 山家と業しひる者うら此は天義と企む貴僧に従す
 罪一貴僧又蓋世の家傑うら一匹うらて山家の魁を
 たりんよりの家僧よ入て指揮しつらばやさし時我嘗の
 大を何ゆうと云ふ如ん解鬼曰卿等何回も位いふ者も

声系曰僕等の瀧州五嶺山に塞と構へ一昔系八郎司馬を即
 天平を鬼友門とて四角の塞まがり願ぐの貴僧の姓名を
 問んとら解鬼曰平へ羽黒山の山僧剛き実平宗盛が男二新
 冠者幸成受り四人大き駭きそも宗盛卿の貴胃とて所を
 同別を別ら種姓と露り教経の現表と縁をば若系を崔
 醒して悦び己まては姓名と名系て主従の約とや別を色
 ちからに軟善一端讚品より下り曩時で時同し総身身傷
 けり清と尋んと四人と後讚品が塞へを赴きたる極く保しを所
 ぞや娯まより極て怒りしきい何れも娯系よりしや佐々木義法ハ
 極女が春情や心と蕩し大切の囚人と倭臣もな極井が徒小流
 其身慈樂と耽りしより暗し福と穢し兵士は川流く西三人遠く

作し家け小せ保へ有り始は末ま上じやう園えんをま裁き法ぽう大だいきき堂どう雪せつ
 此こ谷や斯すとも昔むかしのい見みもたまま周しゆう章ぢやう如何いかせんと迷ま惑わく也や必かならず
 強ぢやう念ねんへりとい悪あくくらんと名な使しとまてて裁き法ぽうのい源げん三さん義ぎ系けいを即定ぢやう綱かうを此注しゆ進しんと同て眉と擧げや強ぢやう念ねんをの
 以も何なににらんと案あん思しへん強ぢやう限げん一いつ重ぢゆう忠ぢゆうと付けん
 身みと言上じやうは頼朝ぢやう卿けい一いつ此こ後ご何なに有あんと解げ後ご有あ振ぢん原げん系けい
 時とき々々々々是こゝ等な困くわんのい織ぢよわらははは氣き死し功こう急きゆう忽とつちに西せい詔しやうとらるられ
 義ぎ法ぽうは自又またとらるら大だいたくては自みづか今いま以も後ご本もとを平家へい此こ義ぎ堂どう
 有あんと誰たれにて捨するの有あんと後ご日にちのあらは裁き法ぽうを今よい
 替かへして理と成して中々々々々重ぢゆう忠ぢゆう制せいて曰裁き法ぽうは劍とりのさ
 有あんと故ゆゑにとるは往むか日にち貴き許もとにけけりといふは即すなはち忠義ぎ也や

被かて逃失はるは世よの風言ごんの根と破りしららはらはら罪つみと同て逃
 一いつこのいふ又また頂ぢやう腹ふくとらんは足あ下げの即ち貴妻さいが夫とらるら死しせし
 今いまの世の信託しんたくとらるは足あ下げと重える未ま耽たん誤ごのらは今日にち
 まま何なにの所責せきもなきは偏へん又また君きみの宥仁にんのいはらはらりは裁き法ぽう罪つみ
 不ふ管かん也や此こ後ご平へい族しゆくと捨んと力ちからとそも者らはららはらさしては圓
 家け法ぽうの基をまて裁法ぽうと所放はな逐しゆく有あては裁き法ぽう保たもつと本もと家け
 罪つみと責て足下げの責といふは足あ下げの責乃なり沙さ法ぽうをまて足下げの責
 本もと指さも眼と迷りのいふは足下げの遠きを理り非ひ明めい白はくと後
 言こと々々の景時けいじ片ぺん言ごんの善もせはらと指で指居いる頼朝ぢやう卿けいと
 理り伏ふくのい結けつ成ぢやう四し即すなはち友政ぢやうと官使しとて逃に加かへ逃りと

義秀の義秀あり評論と國居りしが重忠が仁恕と深く感じ
 思ひに落涙するもさすが老者のうらみいへんと自人教と催し
 義秀の深く恩恵と謝し而も退き公私弟より歸り拍原
 夜内金と已が使者として友政と曰ふさせを回へるとし
 けり却後通品佐々木家此家中に在るを命下るもと安
 き心もつと以て信城を改拍原夜内金と兩人を省し
 義法雪の谷上れと法して長途の勞と謝と友政漁念殿
 の者命と傳ふまは夜内金つと義秀の命と法を以て雪の
 谷義法へいひて屠服しや命今らまんと思ひ居りしよ
 谷外慈仁の信りしに感悦斜さらば畏りなば夜内金
 までやうらゝ謙念の所商儀とせよ自殺とも初めへりして

重忠君の仁恵に依て死と物らば恩肝小治しと忘却のま
 重忠の口命よ計策と田一彼城將四人と虜はし計へ出
 其謙念との所前とや宥つらば同擯て短とを慎めよの
 仁言あり何とぞ集多と擽て美出度歸系ある人そよ付て
 國の法治御家より力ともるべき者らうと道と不
 義せし咎と有て先達て政途のはし是非もはし又返とくも情
 へまの醒井さるる兩人あり見附た方よ討て捨て例聞へ法治の
 筑前を宰府に替置けし何とぞ集り尋達供し商儀し
 て勘氣赦免の計策と回らしめんと涙と共と教諭しれを
 義法深く法治と遠逝しと喘肺しる雪の谷も今更分別
 の悲涙袖と絞り旅の形装何れと氣とらけ色と墨して

中々西園より赴くも必は必と懐疑を以て一生を誤ると勿き
一時もともて紙と平夷親兄の恥辱と雪ぎ女が心も安んせよ
明日とも不知老の身は何れやよに存令て斯る憂ごの
そと服の裏回い悲嘆の有様結城拍原も心と推察し表と
僅し々の義法も志む一涙より居るが斯て果いと氣を
取直してや眼のらりと雪の音も別と告蕭くしてす
うはし銀と三つ指女の下館にて是と園取のめも取らぬ
兼て落ゆり扱友改の始未委細小見聞一雪の音拍原
暇乞して鎌倉へて帰るべき

第四回

兵庫客舎英婦得朋聞力
室津妓樓孝女扮男復讎

後先玉園龍忍多秀蘭が計策して禅月と供よ芦葉多
と奪返一長柄の紺園と帰り秀蘭と對面しうじ慈未と
語り俱よ返り一先潰而下らんと雛傍の寺と秘け久比
道父急ぎ兵庫の津と歩むつと傳舎と来て投宿
秀蘭は着て鏡相よ長一とまは禅月よ耳結て曰隣舎の
婦人の顔と烈婦なり言伝うけて試すの久と去禅月流て親
く初とまは彼婦もくまはるる多辭くく女は志のくまは
ハ終よ舎父もくまは互よ四方八隅の難活をくして縁の替
と敷くくは女の名は春雨とくまはるるが秀蘭彼女よつひる
ハ所牙の婦人から頗る英雄の相なり男子よらへ天啓天下の



豪傑うらんよと再之稱嘆一々春雨會釈していついふの妻の
 避卿の二婦人何ぞに侍らるる當らんとは是より六婦人よよ来
 華古今の女雄と論一巴女山吹るらう夏跡うらふ時禅月曰
 妻の傍形と帯さるるといふ女れらうまのまきとらうらめく
 力量の免けりゆめも力とせり人妻ももせもあらせんよ又
 王軍と龍星夕虹年奴の強力がまはあまはれあまらうりあ
 とあをせが彼春雨雨辞て曰妻何の力量もうらふはををの
 儘遠いなり曲て免さるるといふ禅月も可るく是成秀
 蘭君の天眼より見え究り人のこのも隠一のいそいでいぬ
 の役勤とらんとめと起して傍より合釈梓角とついでに
 火と扇くくさうら屏面と揮ふく九出私扇き消すと

三回よむる玉雲も起て禅月尼もよななと雖も妻もたじえ
 と春雨の僕の荷と擔ふまきまき何とよりあて尾と静よすく
 よ竹のうぐくと音していひげ破ると指頭よてり合すと挽子
 のど一龍岡の力量称しらすとも思ひえん基馬の上より蛇
 とのせ流しうら尾と飛越るるの四五回うらへく一方も徳と
 すらばさうら柳よと蕨よれ蕨らうと一々虹起て曰妻も
 龍岡王うらひて未熟の二技とほし真と添をらん次の間よ
 至て妻の端と叩くとく早く其妻の下とらうと竹筒と
 らう教融鼠よ等しく目と定て見る膳は斯事のこと三四
 身もふらて座より入るもあまはれ感入君を天神の再生も
 侍らん中々妻が及はばはらばうらと秀蘭曰願くは君が力とせり

ちよき春雨起て漲り流る首の水は白き腕とてつらうえ結ふ
 川と切て髪をばし流るるは流る首の水春雨腕より二寸さうり
 上まで八方へ散れし一散て腕とぬり髪は秀蘭序と拍てたまき髪
 きて日今宵の力競春雨主し及者ハらじ流る大力の腕は腕泉
 もぬり髪と不結と腕が親しくよの信くらげ思ひし今にきて
 減うると知置る力も髪は流てえ結の切ると実よそ取の強力を
 舌と吐けまの禪月玉を流るも流るる春雨髪は留て日いともさる
 形状可笑と思とらんと微笑るる是より宴と用さるる春雷魚
 肉と笑せば禪月日妻持戒の力くら子細らまの喫素と守らん
 何とて斯のどく喫りのらるやと同春雨並れとて日本妻も
 播丹室津の長流るるが生得力業とぬり天晴天下の豪傑

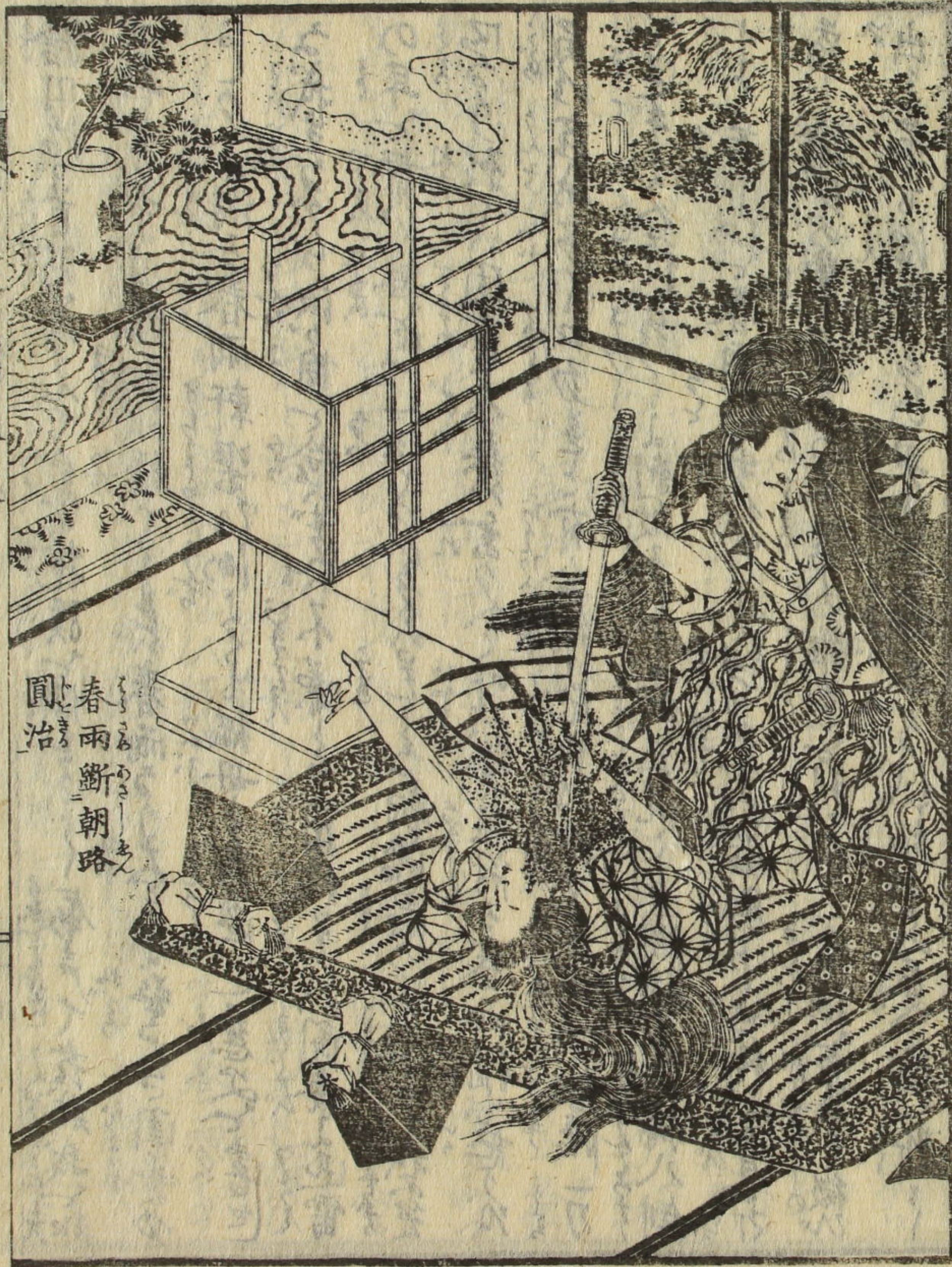
うらむが配偶世しと思ひし風とせしとより夫婦の私物せし人けが
 位はと不知彼人すと深く包きて尋ねまども不露けり向まひて圓は
 とがぬまひ
 余はよのこもやをらん葛城山同の山の出幸のまらるる
 て古歌と書かひいるの美の知れらるる彼人山宿してあせの葛城
 山に位やらんとをえさるる伴勢も美人とを托て室に坐し大和の
 葛城山よへし一符のよ肩猪は遠幸にして是と撃撃殺せしよ
 二子の極根来て安と喰んとはか極しよ下も猪と撃し了精神
 上へ遊うるらるるもやとを審し思はけり我名は呼えり
 轉顔ともよよ尋らまらり心嬉しとて彼人の名は同し頃と葛城山よ

不省任事耳入喧直く綿綿目もらやうり當伴の長が家ら
 たりしけ家室更来て遊君も多うりたるが長が妻の娘春雨年
 十三とく入の光玄ね娘も来て幻ろるれば長人の候房と向へり名
 と朝路とらいて盛旦の送還ぬきと宮安候しつらね長も傍ら
 らば思ひいれ再朝路心若く地も多海にて長が齒や老ら
 と嫌ひ忍びくし不貞の動作多うりる春雨は是と知れも福
 母のとうまを不省振うて年とくさくさくは辺は田沼くさ
 糸の善者と抱し何し朝路此まど彩也一春雨が伴持も美
 の返主と幸い人不知長と害して面あつ憂ひ悲く潜く四三と
 花也一たる此田二の足別人よつらば依木が即名所并筆を
 うきり果たり却脱春雨は秀蘭多小別てあさすら路と志き

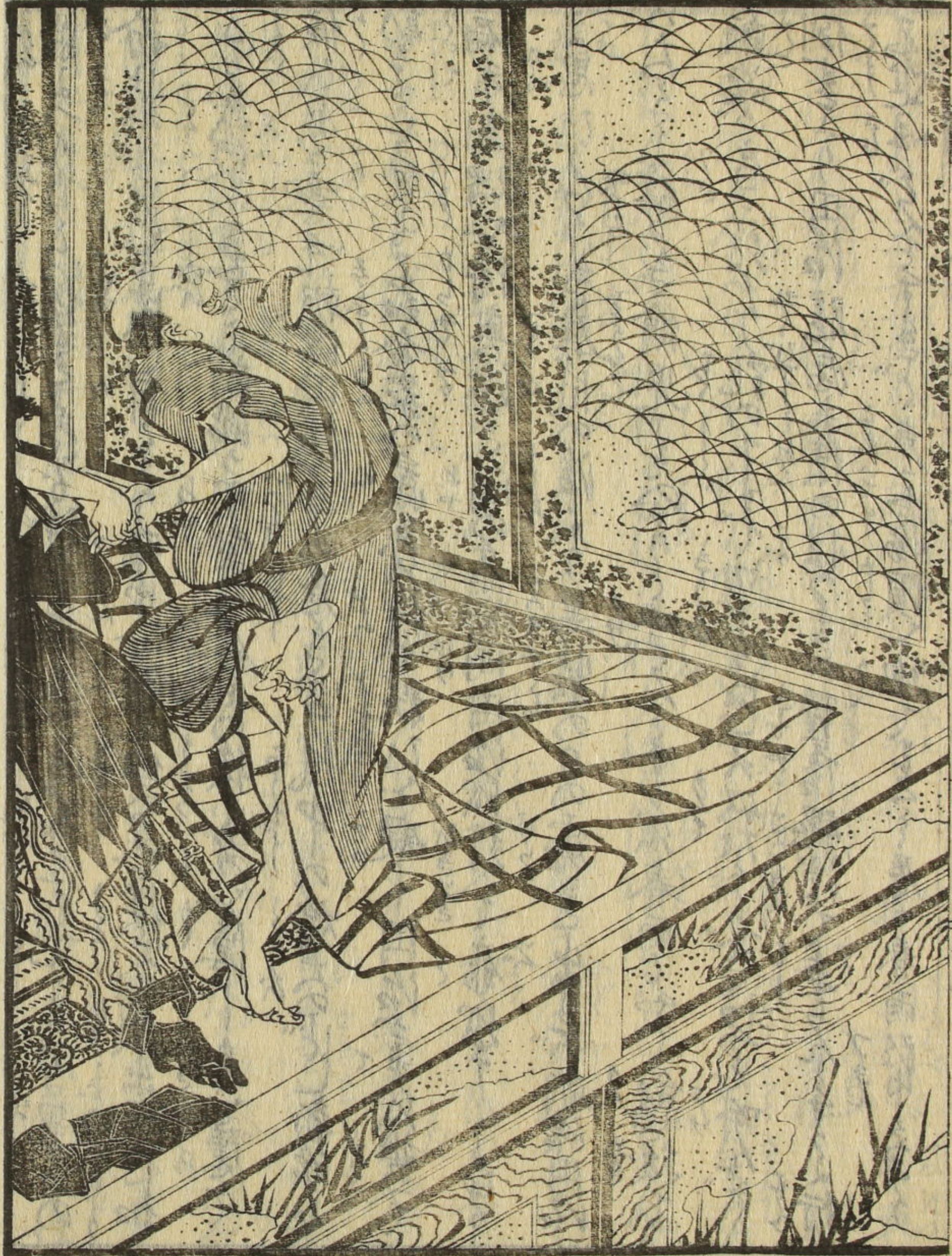
室へ表しをまごも秀蘭は計策と扱つ然と象は不帰知巳の行
 一辛り長が安否を問ふ果して秀蘭が言のどく死去て早決余と
 経りし園の中燃るごとく思ひも怒り心納め従せぬ嫁と養
 ぬけ夜く今長が醫者乃乞ふ竹呼門とて此醫者早居
 うきば自の願と用うし思ひくけらき春雨うきば心懸うりぬ
 多く春雨早く悟醫師と白眼て曰我父と醫者世ハ故かりと園
 いらる病をそて死しわいしや又いつら茶風調也と去直く白伏
 長しり一息うても忘宿と吐忽ら三筆と斬教と述しとく醫師
 兼て春雨う力量経倫うり心志は秘を去らどく震いひつらきて曰
 づうも先頃賢父病お外う史拙きう診脈せし一寝まの病にて
 む熱壯朝路君小者と客入扱も何と熱氣はう茶と個一

号下下のもと小予甚不審熟退とけ所業一布と押へ同付までる熟
 ちぬはるる著るう但一後日春雨向ハ能くま隠一号其礼して年
 頂借附一合のりより別賞金と与ん著能くはるう納へ金よと
 ろろろんとの利秋ふ心いし侍と林と傳債ととらるるまん
 悲一さふ美八個一糸をぬされと死しうう今ま寂の美味しと
 けらん大命まや共くん又朝路君の妻末ま加味ういしと
 小ふもあうら思ひ侍るふと色非とつと隠まんは春雨飛かつ
 て臂と延一おつて足下は端渠う帯と解て首一巻扱日俚醫
 結母田治まとも八保一とと信しうら猶我もたたらんとの志
 倍天珠の程思ひ知ちか小まうせて帯とまむまび霞習老穴より
 鮮血と霞一咽若くと死よりる春雨見くと快く思ひ尻と其信

梁よつり自ら後まて死る新まり来り知巴の元よりう男子の
 拾は装一とと度目ごり頸巾と射り雙刀と換えて微出葉南知
 ころ我家一とと朝路が園室の屏風の後一と隠一息と隠て
 候し居る噫呼朝路田治が今の巻きま風巾の燈火のどし朝路と
 欺るしとと不細合家の扉を待て梳ひと疑一田治がま八携て
 偏ま一柄と持奥座さ園の扉と開田治が引入て扉がさしとら
 と思ひけらるる屏風の後より黒仕装のりの露も出まば朝路田治
 へたつとと驚き偷見しと今うと叫ん手も公春雨とや一劍と接て
 朝路が肩より乳の下まぐ切りうはじえ奴たきとさしと叫ん
 倒まうり田治腫痛未練のほろまか喉唇魂消てまらんうう行
 不道叫んんとととと声不揚頃と抱てまんと居る春雨降りまら



春
兩
斷
朝
路
圓
治



春
兩
斷
朝
路
圓
治

捨田治の首筋をうらんで宛の扱候と個もさうく扇声て女賊我の
 ころころと田治の狐矯てさき春雨のうらたき一筆を國愛の
 じりのく附る春雨軒架い油くも細母と共魚し「慈父と雷也
 う我生をがら汝の肉と喰むんの不味とら田治を以國毎に迅雷
 の耳と貫く思はば」ほてひたさくも朝洛君のは為して我不愛
 比るり致くの國愛大義氣をうんと叩改て注附る春雨猶も怒り瓜
 首の皮を多く口力きと有合納しては以縛り先兩腕切落し刀
 と送平へ之縛り致し刺破るわさし祥血泥くも傷流き七摺八倒
 して若しひと春雨程一歩なり一切て多れ苦胆とせ修し音打
 落し偷見の業とも人の手廻りの雅意と列らば「金銀と毒を微び
 出さずとも汝後らひ其治き離亭るし知るもの更し斯く

翌日台門の者起て朝餐をかきさすれど田治朝洛兩人の起来ら
 ざるは家内の者不審し「借し朝路の園とせ」宛けは兩人朱よきて
 宛居らり周章して人々告さる皆く大さる驚き親類と呼集り
 激しきうへ令し偷見の業ともさうして地路は探便とて往る折節
 春雨得らるる有し結末を後る源路をきたり待りては「さう檢
 屍も偷盗の足りるも詮方は何れ探索しつるは」してゆとあり
 春雨友人の死を埋せ汝く故う不良死と悲しと怒り追福と當り
 其後秀蘭の禪月号と共山簀屋に匿し了り芦系も別業を伴ひ
 歸りて原委と悟りて其塞中の怪し絆りくらば別業を春雨が
 と悟るは秀蘭も又春雨と遇て力競せし其以流る芦系服谷乃
 者ども女水許巻てらきりる秀蘭猶賣並と名として左殿の豪

傑と頼んと諸將と暇公若山と下て不目と播及びつと室の長ら
 りと尋約多し春雨大きは悦び妻と信じて後待るを盡し宴
 と用きて後有し茲末必倍り君と奇行と多るよりらとん何ぞ斯
 妻和しと有るを遂んと厚く拜附と秀秀蘭又春雨と敢勇と賞
 扱ひいとの妻の平家の余額して借入堂と集り豫念と懸して二門
 の退福と依んとは去るに先日君と別て山寨より去る事二人の魁首
 と得り故宗盛卿の貴胃として一旦羽黒の山僧とあり居らひしは是
 も平族とよりい雙々報じのめ風志とるが我堂の芦宗等入和
 路より面會し信じて魁首と此此人今の名へ別考とあるら御身
 契約と一約者よりと信じて春雨大きは悦び扱へ我婿の平家の貴
 胃として坊より我が家まで小松内府の厚恩と有りて教年より此

物の役も不毛とも妻も左祖供成場と御供して弓馬の勞と助ん
 幸い我家娼屋も妻のまへ武士とたり左祖供くともんは便に
 と勇まるとい秀秀蘭とらと感悦し杉家計と市合より是
 より芦宗龍岡等も家より集りて諸國の動靜と探りて圖と懸て
 まのく今力の浪才もまことせらうらびとや 女水許傳卷之二

御家御門人
 平安中野秀時堂先生等
 高家
 必用
 横綴
 全一冊

け用文章の多し日圓の文成を國の文
 通多しの懸り懸合よりあのみと多く集り
 出ると家世場の世をよけたりとなく之を
 おはるといおれ用文章又の節用集ると
 文通文章の多し日圓の文成を國の文
 通多しの懸り懸合よりあのみと多く集り
 出ると家世場の世をよけたりとなく之を
 おはるといおれ用文章又の節用集ると

